

技術委員会からの提案について

1 投手のサングラスについて

【現 行】全軟連 HP で「投手以外のサングラスの使用は認められています。特別な事情により投手が使用する場合は、事前に審判員へ許可を取るようになしてください。」と掲載されている。一方、競技者必携 2022 には「サングラスは、大会本部の承認なしに使用できる。ただし、投手は使用できない。」となっており一致していない。

【改訂案】HP の掲載は削除し、2023 年から投手の通常サングラスの使用を認める。必携文面を「サングラスは、大会本部の承認なしに使用できる。ただし、投手はミラーレンズサングラスの使用はできない。」に改訂する。

【理 由】現在、生活する上で使用している「偏向レンズメガネ」や「調光レンズメガネ」は、ルール上サングラスではないとの解釈をとっており使用を認めているが、通常のサングラスとの区別がつかないことから通常サングラスの使用を認めるものである。

《その他》打者席・球審の位置で検証したが違和感はない。

1-② サングラスを帽子の庇の上にのせることについて

【現 行】野手がサングラスを使用することは認めているが、帽子の庇の上にサングラスをのせることは認めていない。理由は、衝突プレイ等があった場合に、怪我をする危険が懸念されたためである。一方選手からは、プレイ中に陽の直射や陰りと変化があるため認めてほしいとの要望がある。

【改訂案】野手がサングラスを帽子の庇の上にのせることを認める。

【理 由】野手と走者の衝突プレイがあった場合、サングラスをかけていようと帽子の庇にのせていようと、身に着けていることには変わりがなく怪我のリスクは同じある。現在のサングラスは痛烈な打球が当たったとしても割れることがないよう耐衝撃性である。BFJ の用具部会において JABA 及び大学野球の過去の事故例を確認したところ、サングラスが原因による怪我の報告はないとのことであった。

2 指名打者採用大会の拡充について

【現 行】指名打者を採用している大会は「全日本シニア」と「日本スポーツマスターズ」である。

【改訂案】天皇賜杯 ENEOS トーナメント、国民体育大会、高松宮賜杯 1 部・2 部大会、東・西日本 1 部・2 部大会、水戸市長旗東日本大会、西日本選手権大会、中部日本都市対抗大会、スポニチ杯大会他全日本軟式野球連盟が主催する大会においては、指名打者制度を採用する。チーム及び審判員の準備も必要であるため、令和 5 年中を周知期間とし HP 等で広報していく。実施時期は令和 6 年からとし、競技者必携への掲載も 2024 年版からとする。

なお、少年部・学童部大会については、中体連及びスポ少との関連があるため各団体と協議を経て実施可能か検討していく。

【理 由】野球は多様性のあるスポーツであり、多くの選手に出場機会を与えると共に、試合を見る側からもエキサイティングに感じてもらうため、指名打者制度採用大会の拡充を

図るものである。

3 パンチアウト、ストライクスリーのオーバーアクションの採用について

【現 行】全軟連では従来型のアウト及びストライクスリーのジェスチャーを行なっている。

【案 件】3月5日の指導員研修会において表記の件を討議してもらった。結果、多くの指導員からパンチアウト、ストライクスリーのオーバーアクション（プルアウト）のジェスチャーを導入すべきとの意見があったことを加味し、2023年より実施することとしたい。

なお、サイドアームストライクについては1年間の検証期間を設け、実施することが望ましいか更に検討する。

また、学童部・少年部の大会においては今までどおりのジャッジとし、同大会での採用については、一般大会における運用検証後に改めて協議することとしたい。

【実施方法】実施については2023年よりとし、採用する・しない、行える審判員の人選（例：1級以上、2級以上、全ての審判員）は支部で決定する。実施しない支部において全国大会、ブロック大会が開催される場合は、派遣される審判員のジェスチャーを認めてもらいたい。

4 全日本シニア大会及び日本スポーツマスターズ大会の延長戦について

【現 行】7回を完了して同点の場合は、健康維持を考慮し、次の方法により勝敗を決する。

(1) 延長戦は9回（最長2回）まで、もしくは試合開始後、2時間30分を経過した・・・

(2) 前記を終了しても同点のときは、タイブレーク方式を行う。

【改訂案】7回を完了して同点の場合は、健康維持を考慮し、タイブレーク方式により勝敗を決する。 (1)・(2) 削除

《理由》7回戦試合は、全日本シニア、日本スポーツマスターズ、国体の順位戦であるが、国体はすでに8回からタイブレーク方式を採用している。全日本シニアと日本スポーツマスターズは、選手の年齢層が高いため試合を重ねると足に痙攣を起こす選手が多く発生する。選手の健康管理を考慮して延長戦は直ちにタイブレーク方式により勝敗を決することが望ましい。

令和4年10月18日

技術委員会